

## I. 実施概要

### (ア)調査の目的

本調査は、内部質保証ならびに自己点検・評価の一環として、神戸女子短期大学(以下、本学とする)の現状・特徴を把握し、マーケティングやエンロールメント・マネジメントに活用することを目的とする。

### (イ)調査対象

2023年10月1日現在、本学全学科(総合生活・食物栄養・幼児教育)に在籍する全学生236名を対象とした。

1年次生 96名

2年次生 140名

### (ウ)調査方法

一般財団法人 短期大学基準協会が実施している『短期大学生調査(Tandaiseichosa)』を用いた。本学においては、平成29年度から継続して同調査を行っている。

方式：マークシート式

時期：令和5年10月～11月中旬

回収率：回答者数234名/在籍者数236名 99.2%

## II. 結果・考察

### 【結果】

- A0入試による入学者割合(42%)昨年度とほぼ同様(昨年度本学(43%)、今年度全国(29%))
- 入学動機は昨年度とほぼ同様の傾向である。
  - 重視している項目(重視した+やや重視した)
    - ① 自分の興味があることや専門分野の内容が学べる(95%)
    - ② キャンパスの雰囲気がよさそうだった(84%)
    - ③ 就職するのに必要な資格が取れる(83%)
  - あまり重視していない項目(重視した+やや重視した) ※同率
    - ① 奨学金や学費免除などの経済的サポートがもらえる(40%)
    - ② 専門学校に行きたくなかった(40%)
    - ③ 4年制大学に編入することができる(40%)
- 授業内容の傾向  
全国平均に比べて「定期的な小テスト」「体験的な学習」の項目が高かった。その一方で、全国平均より低い結果となった項目は、「提出期限までに宿題を完成できない」「外国語を使う」「授業をつまらなく感じた」等であった。
- 学習時間：全国平均と比して、アルバイトに費やす時間が多くなっており、学修時間が減少傾向

である。

- 教員と関わる機会：全国平均と比して、進路相談は多いが、研究に関して関わる機会が少ない傾向である。
- 活動や体験：令和3年度から比較し、地域貢献・ボランティア活動への参加度は令和3年度7%、令和4年度14%、令和5年度25%と年々増加しており、コロナウイルス感染症の影響で落ち込んだ学生の諸活動が回復してきたことが伺える。また、海外旅行、学校行事の委員や運営スタッフなども、昨年度より増加している、
- 施設・サービス：全国平均と比して、全ての項目で同等以上の満足度である。
- 教育：全国平均と比して、授業に関する満足度は高いが、サークルや部活に関する満足度が低い。サークルや部活については「わからない」と回答したものが半数を超えており、参加意思がなく回答しづらい学生が多いと思われる。しかし10%近くの学生が不満と感じており、潜在的なサークル等への活動意欲を持つものが一定数いることが伺われる。
- 能力や知識：概ね向上・増加したと実感しているが、リーダーシップや外国語を使う力、数値やデータなどの理解力、自学自習の能力、選挙への関心に関しては過半数が向上(変化)していないと感じている
- 進路希望：総合生活学科は「ビジネス・経営系」「旅行・ホテル・ブライダル系」「医療・看護系」「アパレル・ファッション系」「美容系」など多岐にわたるが、決まっていないとした者が30%と一番多かった。食物栄養学科は「食・栄養系」(68%)、幼児教育学科は「保育・こども系」(90%)と各学科の特徴が表れている
- 総合評価：充実度(71%)、他の学生(68%)・教員(78%)・事務職員(65%)との関係、キャンパスの居心地(71%)、まなび(学習)(76%)については、昨年度と比較して全体的に満足度が上がった。

### 【考察】

令和5年度の結果としては、昨年度とほぼ同等の傾向を示しながらも全体的に満足度が増加していた。

ボランティア活動の参加率が上がるなど、課外活動が活性化し始め、学生生活の充実度が上がったことが要因の一つとして考えられる。しかし、「自分が進学した短大をすすめられるか」という項目で、あまりすすめられない(8%)、すすめられない(5%)と10%を超える学生が回答しており、何に起因するものであるのか学生個々の状況等を精査し、今後の大学運営に活かしていかなければならない。

昨年度と比して、受講した授業で、プレゼンテーションをする(60%→66%)、学生同士でディスカッションをする(88%→91%)、体験的な学習(77%→85%)などの能動的な学習が増加傾向にあり、105分授業導入後から授業の工夫を行ってきた教員側の努力が窺い知れる。